

と、終戦後ずっと申しておりました。

私の主人も、二十年七月二十五日現地召集でした。戦死いたしました。公報は三十四年です。引揚げの時の長男も今年三十一歳です。

身体が弱いので、なかなか本人もガンバリたいのですが、思うにまかせません。でもだんだん元気になりますので、その内いいこともあると思っております。

ひとつの思い出

静岡県 平井正元

昭和十三年渡満、昭和二十年敗戦、昭和二十二年引揚げまで丁度十年間、妊娠七か月の大きい腹の妻とともに、リュックサックを背負い日本に上陸し帰郷したのが昭和二十二年二月の寒いときでした。

大連港の岸壁の倉庫に市内の知り合いと、ソ連の突然な侵略に奥地から丸裸で逃げてきた数万の人達と一緒に収容され、故国から配給された貨物船に、ソ連兵の厳し

い調査をやっと解放され乗船し、出港からは玄界灘を暴風雨と大波に揺らされて、暗い日本海を経て雪の舞鶴港に上陸できました。

敗戦時では北鮮に近い東辺道の盆地の通化で、関東軍の輜重部隊へ現地召集として入隊しておりました。当時、満州国の皇帝が新京を遷り通化にいたので関東軍の主腦も通化で最後まで戦うのだと言っておりました。

私達中隊も、そのつもりで兵器や車馬の輸送を懸命に努力しておりました。私は地域の状況が分かるのでトラックの班で周辺で食糧集荷を毎日行なっていましたが出るごとに街であう満人動向や私達、兵隊を見る目がだんだん違ってきました。暗くなると周囲の山々で煙火が上げられ、それに応ずるように朝鮮人の若い兵隊が一人二人と隊を脱出し、それを追う銃声が毎晩のことであり、戦争の終りが切迫したと思えました。

八月十五日、部隊は集合され天皇からの『終戦の詔勅』を放送で聞きました。そのときなんだか涙が出てきました。

はじめて戦争に敗けたので、これからどうなるのか、

兵隊は誰も分かりませんでした。二日程ポカンと過ごしておりました。

戦争は終わった。外地で死ぬより生きたいと思った。急に母がいる日本へ帰りたと思った。隊を脱出するつもりになった。

隊から多勢では不可能である。若し出たとしても途中が危険である。私は大連の友人と二人で実行することにした。

昼、用件を持ち二人で街に出ることができた。

日本人の雑貨店に行き主人にあつて内容をお願いし支那服を二着買ってもらい二人とも兵服を脱いで暗くなるのを待った。薄暗くなったので主人にお礼をして速足で駅に向いた。

駅構へ入ると直ぐ分かるので線路側から構内に入り十数人の兵隊が乗っている蓋貨車へ行つて『一般人です奉天へ帰りたいので途中まで一緒に乗らせて下さい』とお願したところ、簡単に乗らしてくれ親切にしてくれた。

この兵隊の列車はソ連軍のところに行くとのことであった。何処へ行くのか心配だったが梅花口を経過すること

は分つたので二人共、じっと、すわつて目をつぶつた。兵隊達は私達に話しをせず寝ころがっていた。夜、列車は動き出した。私達は始めて、ほつとした。しかし、目がさめて寝られなかった。梅花口に着いて乗り換えのため降りた。列車は吉林に向いたのでシベリアへ行くだろうと思つた。お礼を言つて別れた。

南下する列車へ乗つた。撫順で下りて奉天、大連の様子をみるつもりだった。夜、遅く着き撫順神社に泊まつた。逃げてきた日本人でいっぱいだった。『神社だから憲兵もソ連兵も来ないだろう』二人で笑つていたところ突然目が、ぎろりとした支那服を着た男が一人入つてきた。憲兵だと思つた。彼は満人達から捜されているので逃げているとのこと、落ちつかず間もなく何処かへ行つてしまった。俺達も危いと思ひ、その夜の内に神社を出て駅に停まっていた列車に再び乗つた。周囲はほとんど満人だった。二人で向いあつた満人の隣に坐つて、うとうとしながら奉天へ向けた。奉天では明るくなつた。大連行きは大変な人達で列車の中へは、とても乗れないので屋根へ登つた。屋根も一ぱいだった。走るときは腹ば

이었다。鞍山附近でやっと客車の中に入ることができた。ソ連兵が、ときどき乗車し日本人を連れ出した。私達は帽子を深くして満人の隣で、じっとしていた。通化から大連まで七四〇キロぐらい懸命に逃げたのです。

大連に帰ると会社の人達が「まあ、よく早く帰ってよかった」と喜んできてくれた。酒を飲んで二日間、ぐっと寝ることができた。

ソ連兵は、すでに大連に入っていた。夜は銃声の音で、とても出ることはできなかった。中国政府の布告が街に出された『器物を破棄した者は重罪を処する』だった。

メリヤス会社の社長から、若し暴動で工場が破壊されると責任者が逮捕されるから直ぐ工場へ行ってもらいたい。とたのまれ沙河口から二里程離れた田舎の馬欄屯に出かけた。工場には日本人の従業員の男女子供が七人、不安そうにしていた。私が行くと喜んだ。

その晩、暴動がはじまった。男女老人、子供、数百人が青竜刀や金物をガンガンやって大声を出して工場に入ってきた。棒を持っていたが、多数の中に巻きこまれ危険になった。二時間ぐらいでメリヤス製品や綿糸をはじめ

機械にかけた糸まで全部盗られ家屋や機械は、ばらばらに破損された。命があったことをよかったと思った。それから政府から工場の没収の通知書がきた。社長は真っ青になった。私は責任者として被服部に出て実在を報告し、有るものを全部出した。部長は止むをえないと言って会社への責任の追及はしなかった。

しかし困ったことは、兵隊に行くとき、空襲を防ぐため私財を全部工場に置き、暴動に全部盗られ、着ている支那服だけで裸になったことでした。それから引揚げするまで二年間、妻と一緒に苦しい生活がはじまりました。

従軍看護婦としての体験記

群馬県 藤 井 芳 子

私は、太平洋戦争に従軍看護婦として参加し、戦中、戦後を通して悲惨な生活を余儀なくされた一人であります。